

はじめての読書感想文

ぼくが一番嫌いな宿題は、読書感想文だ。

と言っても、これまでやったことはなかったけれど。

そもそも、ぼくは読書したいが嫌いなんだ。

先生や大人たちは、「本を沢山読め」「必ず将来の為になる」「じぶんの世界が広がる」って言うけど、ただ字だけをぎゅうぎゅうに詰めこんだ白黒の紙束が、役に立つなんて思えない。

あたらしい校長先生も、本を読めって言う大人のひとりだ。去年までの夏休みの宿題では、読書感想文は自由課題のひとつで、工作か感想文どちらかをしてきなさい、って言われてた。だから去年までは貯金箱とか人形とかを、粘土なんかで作ってすませることができた。

なのに、今年来たあたらしい校長先生がそれを変えてしまった。工作はやってもらなくてもいいが、読書感想文はかならず書きなさい。それを担任の先生から聞いたとき、楽しみだった夏休みが、とたんに嫌になってしまった。

「はああ…」

夜、風呂からでてパジャマにきがえ、おもしろくもないニュース番組をながめながら、何回目かわからないためいきをつく。

「どうした？」

ぼくの正面に座って、ビールを飲みながらテレビを見ていた父さんが、ぼくのためいきに気づいた。

「どうもこうもないよ…」

両腕に顔をつつぷしたぼくにかわって、母さんが台所から答える。

「宿題の読書感想文。今年からは絶対やらなきゃいけなくなったんだって」

「へっ、マジか」

おもしろそうに笑う父さんをぼくはにらむ。本好きの父さんにはぼくの気持ちはわからない。テレビの横にある本棚には、数えるのも嫌になるほどの本が詰まっている。ほとんどぜんぶ父さんのので、母さんのはレシピ本や掃除の本が少しあるだけ。もちろん、ぼくのはない。

「ま、いい機会じゃないか。これを機に、おまえも読書をはじめてみたらどうだ？」

「やだよ」

父さんが言いおわらないうちに、ぼくは言いかえした。

「やだよって、じゃあ宿題はどうするんだ？」

そう言われてぼくは、今度はなにも言いかえせなかった。読むのはいやだ。けど、宿題をサボって先生におこられ、クラスメートに笑われるのもいやだ。

そのとき、テーブルの下でなにかが足にさわった。見ると、飼い猫のラックスだった。ラックスの名前は父さんがつけた。好きな小説にでてくる黒猫の名前をつけたらしい。

「そうだ、ラックスの本なんかどうだ？」

テーブルの下から出てきたラックスを見て、父さんは言った。名前を呼ばれたと思ったのか、ラックスがニャーンと返事をするように鳴く。

「たしか、おまえの部屋に…」

「もういいよ！」

ぼくはぶつきらぼうに言い、コップの麦茶をのみほして立ち上がった。

「おやすみ！」

どすどすとうるさく歩き、じぶんの部屋に入る。

ベッドのそばの棚には、数冊の本がおかれている。父さんが、「リビングの本棚に入りきらないからおかせてくれ」って言ってたけど、ぼくに読ませようとする作戦だと、ぜったいにそう

だとぼくは思っている。

その本たちを見てますますイライラしたぼくは、いちばんぶあつい本をつかみ、床に投げすてようとしたけど、さすがにやりすぎかと思い、ベッドに投げつけることにした。

ぼふん、と音をたててシーツのうえではずんだ本のページがひらいた。ずらずらずらずら、ひたすらに文字ばかりがぎょうぎよくならんでいる。

それを見てよけいにむしゃくしゃしてきたぼくの横で、少し開いていたドアが勝手に閉まった。いらだちもふつとぶほどびっくりしたけど、足元にラックスがいたので、ラックスが閉めたんだと気づいた。猫のうごきの静かさにはほんとうにびっくりする。その上、開けばなしかつたドアを閉めるなんて、人間のぼくよりしつかりしてる。

そう思ったとき、ぼくはふと思いついた。

思いついたといっても、くだらない冗談だ。ぼくはベッドにこしかけ、ラックスを見つめた。

「なあ、ラックス。おまえ、ぼくのかわりに読書感想文を書いてくれない？」

ラックスは、当たり前だけどなにも言わず、ぼくを見つめかえす。言ってみてから、ぼくはばかばかしくなった。

「…寝よ」

立ちあがってドアのそばにある電気のスイッチを見る。風呂に入るために部屋を出たとき、また点けっぱなしにしていた。

スイッチを切る前に、なんとなくラックスのほうを見た。ラックスは棚の上の本を見つめているようだった。

まるで、どの本を読もうか考えてるみたいに。

そう思って、またばかばかしくなる。

「消すよ」

そういつてスイッチに手をのぼしたとき、ニヤア、とラックスが答えるように鳴いた。

寝る前にトイレに行くのを忘れていた。夜中に目がさめたのは久々だった。

トイレからもどつてからベッドに座り、ふと窓のほうを見る。

…あれ？カーテン、開けてたっけ？

街灯がまぶしいので、いつもは閉めて寝ている。開けっぱなしだったなら寝るときに気づい

たはずなのに。あ、もしかしてラックスが開けたのかな。ラックス、どこに行ったんだろう。部屋を見わたして、またおかしなことに気づいた。ベッドに投げた本は、寝るときに床にいた。ベッドのすぐそばに投げるようにおいたはずなのに、部屋のまんなかあたりに移動して。ちょうど、窓からの光があたるところに。

なんとなくひろおうとかがむと、今度はベッドの下にラックスがいることに気づいた。「そこにいたのか」

ベッドの下をのぞきこみ、ぼくはラックスと本を見くらべた。

「あ…もしかして、おまえが読んだの？」

寝ぼけた頭で冗談を言い、笑ってみる。

「そうか、なら、おいといてあげるよ。けど、読みおわったらじぶんでもどしとけよ」

そう言ってぼくは本をそのままにし、ふたたびベッドに入った。

横になって眠りにおちる前、ちらっと本のほうを見た。

開いたページをラックスが見つめていた。

ぼくは目をつむり、これは夢だ、とじぶんに言いきかせた。

猫が本を読むなんて、ありえない。これは夢だ。ただのヘンな夢だ……。

…さてよ？

ぼくはすつと体をおこした。

夢なら、なんだっていいじゃん。寝てしまうことはない。夢なんだから、きっとこれから、もつとふしぎな、おもしろいことがおきるに違いない。

そう思うと、わくわくしてきた。ぼくはぴよんとベッドからおり、ラックスのそばに座った。ラックスはきよんとした顔でぼくを見ている。

「ラックス、本なんて読んで、おもしろい？」

黄色い目でぼくを見つめかえすラックスの顔を、ぼくは正面からのぞきこむ。おもわずにやと笑ってしまう。

「なあラックス、これが夢の中なら、おまえ、しゃべれたりしない？」

ラックスはおどろいたように、目をぱちぱちとさせた。そして、くくつ、とのどを鳴らす。笑ったみたいだ。

「バレちゃったか、とうとう」

ラックスはためいきと笑いのまじった声でつぶやいた。

いししつ、とぼくも笑う。真夜中、じぶんの部屋で、ぼくと黒猫のふたり、じゃなくてひとりといっぴきで、秘密の話。夢の中だとわかつてはいるけど、楽しくて、おなかの底が熱くなってくる。

「ラックス、本なんか読んでないでさ、外に遊びに行こうよ。夢の中なんだ、なんだって……」
立ち上がり、はしやいで声を大きくするぼくに、ラックスは声を低めてささやいた。

「しいーっ……夢のなかで『夢だ』って言ったら、夢がさめちゃうよ」

はっとして、ぼくは口に手をあてる。たしかに、悪い夢を見ていて夢からさめたいとき、ぼくは、「これは夢だ、これは夢だ」っていつもじぶんに言い聞かせる。そうするといつも目がさめるんだ。ぼくは深呼吸してじぶんをおちつかせ、座りなおす。あぐらをかいたぼくに、ラックスは言った。

「なあ、ケイ。今日は、きみと話がしたい」

「はなし？」

ぼくは聞きかえした。せつかく夢の中なのに、話をするだけなんて、つまらない気がする。

けれど、夢の中ではひとの言うことを聞いたほうが、より長く夢を見られる。ラックスは人じゃないけど、同じことだ。

「じゃあラックス、なんの話をする？」

「それはもちろん、本についてだ」

とたんに、ぼくはげんなりとしてうつむいた。やっぱり、言うことを聞かないほうがいいときもあるのかも。

「なんでさ。本なんてつままないよ」

「つままない？」

ラックスは首をかたむけてぼくにたずねる。

「読んでみたことがあるのか？」

「あるよ、一回だけ」

「なんの本だった？」

ラックスは興味深そうに聞いてくる。

小学校に入学したとき、父さんが、「もう小学一年生なんだ、なにか読んでみたらどうだ」と

言って、ぼくに小さな本をわたしてきたことがある。一ページも読まないうちに投げ出したけ
ど。

「おぼえてないよ、そんなの」

ぼくはむすつとして答えた。

「なんだ、おぼえてたら読んでみようかと思ってたのに」

ためいきをつくラックスに、ぼくは聞きかえす。

「読んでどうするのさ」

「どうって…」

ラックスは手、じゃなくて前足を口にあて、少し考えてから答えた。

「そうさな、じゃあきみのために、その本の推薦文を書くでしょう」

「すいせんぶんって？」

「この本はこんなふうにおもしろくて、おすすめですよ、っていう作文。あ、それとも、読書
感想文のほうがいいかな？」

「ああ、そうだね、そうしてくれよ。そしたらぼくは、それを宿題にもっていける」

「けど、ざんねんながら、おれのこの手では文字は書けない」

ラックスは前足を持ち上げて振ってみせる。

「だから、言葉はおれが考える。文字はきみが書いてくれ」

うーう、とぼくのはのを鳴らす。けつきよく、長つたらしい文章を書かなきゃいけないのは同じなのか。でもまあ、他のだれかにたのむあてもないし、読む作業をしなくていいだけでも、ずっと楽だ。

「わかった。じゃあ読むのはたのむよ。書くほうはがんばる」

「それじゃ、おれからも一つたのみがある。本屋に行つてほしい」

はあ？と思わず声を上げそうになったけど、今が夜だというのを思い出し、なんとかこらえた。

本嫌いが本屋に行くなんて、動物嫌いが動物園に行くようなものだ。

「なんでさ？」

「きみが読まなかった本も気になるけど、カラスのだんなに聞いた話で、おもしろそうな本があるんだ。けど、それはうちにはない。だから、買ってきてほしい」

「ええ…」

「それがかわりに文章を考える条件だ。タイトルは『言葉で話すことばのはなし』。この本の感想文しか、おれは考えない」

ぼくは悔しくて歯をくいしばった。そう言われては、こちらはどうことを聞くしかない。

「わかったよ、もう！」

ふてくされてラックスに背を向け、ぼくはベッドにもぐりこんだ。

「おやすみ」

ラックスの声にぼくは答えなかった。

起きてから思い出してみれば、あれは夢だったはずだ。だから、あんなに怒る必要もなかったし、寝ちゃわないでもっと遊べばよかった。

そう思いながらぼくは服をきがえていた。

「おはよう」

「おはよー…」

なんとも思わずに答えてから、ぼくは凍りついた。ゆっくりとふりむくと、ベッドの上でラックスがこちらを見ていた。

「どうした、幽霊でも見たような顔して」

くくつとラックスは笑う。ぼくはぼかんとしてから、ぼそぼそと言った。

「ユーレイもしやべる猫も、見たら同じくらいびっくりするものだと思う…」

「へえ、本を読まない小学生でも、そんな言い回しができるのかい」

にやにやしながら言うラックスに、ぼくはなんだかむつとした。

「バカにしてる？」

「べつに。ただ、おもしろいな、と思って」

「なにがおもしろいんだよ」

「意外なことがさ」

ラックスはするりと答えた。

「意外なこと、知らないこと、わからないことに出会うと、おもしろい。そして、それがわかった、理解できたとき、おもしろい。だからおれは本を読むのさ」

「わけわかんない」

ぼくは顔をそむけ、つっぱねるように答えた。すると、

「そう、それだよ！」

とラックスは叫び、目にもとまらぬ速さでベッドからおり、たんすの開いていた引き出しにのぼってぼくの目の前にきた。

「いま、『わかんない』と言ったろ」

ぼくの顔をのぞきこむラックスの黄色い目が光っている。

「いまきみの目の前には、わからないものがある。しゃべる猫。字を読む猫。そして猫でなくとも、きみにとって『本が好きなのやつ』は『わかんない』ものだ」

ラックスはさらにぐつと身をのりだし、鼻先をぼくの鼻に近づける。

「なあ………きみは、『わからない』ものを『わかりたい』と思わないか？」

ぼくはただ、ぽかんとしていた。

なんだ、こいつ。なにいつてんだかわかんない。

わかんない。わかんない。わかんない……。

——「わかんない」が、わかんない。

——「わかんない」って、なんだ？

頭の中のなにかがぐるりっと回ったような気がした。それがあんまり気持ちいいものではなくて、ぼくは思わずそっぽをむいた。

すなおに言うことを聞くのもシヤクだけど、このままほったらかしにする気にもなれない。

その日の昼過ぎ、ぼくはじいちゃんにもらったまま使ってなかった何枚かの図書カードを、財布がわりの小さなポーチに入れてポケットにつっこみ、外に出た。

自転車で十分くらいのところにあるショッピングセンターに、たしか本屋があつたはずだ。けど…。

あれ？と、ぼくは自転車を止めた。

大通りにそって走ってきたら、わかれ道に出くわした。ショッピングセンターがあるのはどっちだっけ？いつも父さんの車で行ってるから、ちゃんとおぼえていない。

ハンドルにひじをつけて信号をにらみ、思い出そうとしていると、電線にとまっていた一羽

のカラスが飛んできて、すぐそばの低い木の枝にとまった。

「きみがケイかい？」

なんとなくカラスをながめていたぼくは、そのカラスがぼくの名前を呼んだとき、ぜんぶの言葉を忘れたみたいにぼかんとしていた。

「あ……」

ふと、ラックスとの会話を思い出す。

「カラスのだんな？」

「ラックスから聞いていたのかい。どうも、はじめまして」

カラスのだんなは翼を広げて頭を下げ、ていねいにおじぎをした。自転車にまたがったまま、ぼくはぎこちなく頭を下げる。

「はじ、めまして」

「どこへ行くんだい？」

「…本を買いに」

「どこへ？」

「ファルブ」

「ああ、あのショッピングセンター」

「うん。けど、どっちの道だったかわかんなくて」

わかんなくて、と言ったとき、ぼくはラックスが言っていたことを思い出した。

わかんないと、おもしろい。わかったとき、おもしろい。

……うーん、やっぱりわからない。

「わたしは知っているよ。教えてあげようか？」

カラスのだんなに言われ、ぼくはわれにかえった。

「あ……うん、おねがい」

「だがその前に、ひとつ、聞きたいことがある」

カラスのだんなはまっ黒い目でぼくを見つめた。

「はじめて自転車に乗ったとき、どうだった？」

「はじめて……？」

ぼくはきよとんとした。

「：おぼえてないよ。三歳くらいのときだもん」

「ああそうか、最初は補助輪つきのものに乗るんだったな。これは失敬」

カラスのだんなは、こほん、とせきばらいをした。

「補助輪なしで、ひとりで、はじめて自転車に乗れたとき、どうだった？」

ぼくは視線を少し下げ、思い出そうとした。

たしか、五才のとき。父さんと一緒に公園に行つて、なんどもなんどもころんで、ひじもひざも砂と血だらけにしながら練習した。

そして、ひとりだけ、ふたつだけの車輪で走れるようになったとき。うれしくて、うれしくて。カーブをまがるとき、体が少しかたむくのが少しこわくて、けど楽しくて。補助輪がひっかかってガリガリ言ううるさい感覚もなくて、ペダルがどんどん軽くなって。公園をぐるぐる走り回ったつけ。

「楽しかったかい？」

思い出しながらにやにやしていたぼくを見て、カラスのだんなはくくつとのどを鳴らした。
「わたしもそうだった。はじめてじぶんの翼で宙を舞ったとき。……わたしは、生きていける。」

そう感じたんだ」

ぼくは想像してみた。じぶんの体だけで、遠く、高く。きっと自転車以上にわくわくするの
だろう。

「はじめて、できた。これからも、できる。そう思えるのはだいじな、すばらしいことだ。けれど、その『はじめて』にたどりつくためには……そうだな、人間風に言うなら……『とびらをひらかなければならない』」

「…とびら？」

ぼくは首をかしげもせず、カラスのだんなを見つめて聞きかえした。

「そう、とびら。あたらしい世界につながる、とびら」

「とびら…」

つぶやくぼくに、カラスのだんなは少し頭を下げた。

「あついで、ひきとめてすまなかつた。ファルブは左だ。気をつけて」

「あ、うん。ありがとう。またね」

カラスのだんなはとびあがり、あつというまにビルの上にはすがたをけした。

とびら。とびら。あたらしい世界につながる、とびら。

……もしかして、本の表紙のこと？なんだ、やっぱり「本を読め」って言うのか。

ぼくはためいきをつき、ペダルをふみこんだ。

「えっ、ないんですか？」

ショッピングセンターの三階にある本屋の店員さんに、さがしてる本がどこにあるかきいてみると、レジカウンターのパソコンで検索してくれた。

「もうしわけありません、売り切れのようで……」

背の高い男の店員さんは、パソコンの画面を見せて残念そうな顔をした。

「注文すれば、二、三日ほどで当店にとどきますが」

ラックスに言ったら、どうするかな。あの口ぶりだと、この本しか読んでくれなさそうな気がする。他の本屋にさがしにいく気にもならないし……というかそもそも、ここ以外の本屋はしない。こどもひとりで勝手に注文するのも少しこわいけど、親に言う気にももちろんない。

「注文は、お金、いりますか？」

「いえ、本の代金だけで大丈夫ですよ」

「じゃあ、注文します」

「では…」

と、店員さんは「注文票」と書かれた紙とペンをとり出し、下のほうのわくを指さす。

「ここにお名前と電話番号を、名前はカタカナのフルネームでおねがいます」

ぼくはわたされたペンで名前を書いてから、はっとペンを止めた。

「あの…すいません、電話番号、わかんないです」

ふだん外から家に電話することなんてないから、電話番号をおぼえるひつようなんてないと思っていた。

「ああ、では書かなくても大丈夫ですよ。本が当店にとどいたときに、お客様にご連絡するた
めに必要、というだけなので」

店員さんにはこやかに言ってくれた。

ということは、もし電話番号を書いていたら、うちに電話されて、本を買おうとしているこ

とが父さんや母さんにばれていたかもしれないってことか。ああ、あぶなかった。もしばれていたら、おおよろこびした父さんが「本を読む気になったか。なら、次はこれもどうだ、あれもどうだ」…と、しまいにはぼくの部屋に特大の本棚をおくところだ。

店員さんが紙に本の題名やらなんやらを書き込み、二枚組みのうち一枚をぼくにわたした。

「あさつてに当店にとどく予定となっております」

「ありがとうございます」

ぼくはそそくさと本屋を出て、まっすぐに家にかえった。

玄関のかぎを開けて家に入り、居間に行くと、ラックスがいすの上で毛づくろいをしていた。

「お、おかえり。本、みつかった？」

今は父さんも母さんも仕事でいないので、ぼくはふつうに返事をした。

「ううん、なかった。けど、注文はできたよ。あさつてに店にとどくつてき」

「そっか。ごくろうさん、ありがとう」

ぼくは冷えた麦茶をコップにそそぎ、いっきに飲みほした。

「ふう…。そういえば、行く途中に、カラスのだんなにあつたよ」

ラックスはぴくりと耳をうごかした。

「だんなに？」

「うん。わかれみちでどっちに行けばいいかわかんなかったところに、だんなが来て、おしえてくれたんだ」

「へえ。それで、なにか話をした？」

ラックスがいすの上から身をのりだす。麦茶のおかわりをそそぎながら、ぼくはうなずいた。

「自転車のはなし。はじめてひとりで乗れたとき、どうだった、って。んで…えっと、『はじめてにであうには、とびらをあげなければならぬ』だって」

「なるほど、だんなの言いそうなことだ」

ラックスは深くうなずき、それからぼくを見つめた。

「じゃあ、おれはそのことばにひとつ、つけくわえよう」

口をつけようとコップを持ち上げた手を、ぼくはふいにとめた。

「はじめてにであうためには、とびらをあげなければならない。そして——そのためにはま

ず、『とびらをさがさなければならぬ』……」

そこでラックスは、ふと視線を下げ、口に手をあてて考えた。

「いや……ならない、ならないばかりじゃ、気がめいるよな。こう言おう。『とびらをみつけてひらこう、そしてはじめてにであおう』」

「みつけて、ひらいて、であう……」

ぼくは口の中で言葉をころがした。ラックスの言いかたは魅力的にきこえなくもない。けど、やるのがふえて面倒くさくなつたような気もした。

「じゃあ、さがしかたをおしえてよ」

ぼくがそう言うと、ラックスの黄色い目がキラリ、と光った。

「おすすめは、ちがう考えかたを知ることだ。たとえば、ほかのだれかの思ったこと、したこと、感じたこと。それを知り、わかることだ」

「ほかのだれかって？」

聞きかえすと、ラックスはにんまりと笑う。

「だれでもいいさ。家族。友達。テレビに出てる有名人。それから、物語の登場人物」

ぼくは眉をひそめた。

「…本とかの？」

「そう。本、とか。小説とか、漫画とか、映画とか、アニメとか、ゲームとか。なんでもいいさ。知れるんならね」

ぼくはふたたび麦茶を飲みほし、たずねた。

「その、とかとか、の中で、ラックスのおすすめは？」

「本」

一瞬の間もおかず、ラックスは答えた。それから、ふっと笑って首をかたむけてみせる。人間の肩をすくめるしぐさに少し似ていた。

「と言っても、うちに漫画はないからおれは読んだことはないし、ゲームなんてなおのこと。だから他のを知らないわけだけど、それをさしおいて、おれは本をつよくすすめる」

「なんで？」

『考え』が『言葉』になってるからさ。こう思った、こう感じた。おれが今言った『とかとか』の中で、一番わかりやすくえがかれているのは本だ。なんでわかりやすいかっていうと、それ

が『言葉』だから」

なんとなくわからなくなってきた、ぼくはまたたずねた。

「なんで『言葉』だとわかりやすいのさ？」

ラックスはゆつくりと、言葉をひとつひとつならべた。

「言葉は、すべてを、えがけるから」

ぼくはまばたきをわすれてラックスを見つめていた。いや、もしかしたら、本当はまばたきしていたけど、じぶんでそれに気づかなかったのかもしれない。

「すべ、て」

「そう、すべて」

ラックスはゆつくりとまばたきしながら、ゆつくりとうなずく。

「言葉は世界のすべてをえがける。世界のすべては言葉にできる。言葉がわかれば、世界がわかるんだ」

ラックスの声は静かだった。けれど、なぜだかぼくはわかった。ラックスは今、すごくわくわくしている。ぼくに話して。世界をわかる、ということを思いうかべて。

ただ、ぼくにはその気持ちがわからない。

「変なヤツ」

ぼくはつぶやいたあとで、じぶんが笑っていることに気づき、ちよつとおどろいた。

二日後の夕方。とどいた本を買うのに、もっていた図書カードの金額をほぼ全部つかった。本屋の緑色のビニールぶくろをもっているところを、知り合いに見られたくなくて、本はせおつたりユックサツクの中にぶくろごとしまっていた。

エレベーターの下向きボタンを押して待っていると、後ろから声をかけられた。

「あれ、ケイじゃん」

そういつてぼくのとなりにあらわれたのは、同じクラスのユウジだった。

「なんか買いモン？」

「あ、うん、ちよつと…」

と言いながら、ぼくはおもわず本屋に顔を向けてしまう。そしてそれがユウジにばれてしまった。ぶくろを隠した意味がまるでない。

「え、うつそ。まさか本屋？マジかよおまえ、オレとおなじ本嫌いドウメイじゃんか…」

「いや、あの、その…」

ぼくはとっさに作り話をでっち上げた。

「そ、そう、本屋。だけど、ぼくの本を買ったんじゃないなくて、あの、と、父さんの本を…」

「え、なんで父さんのをオマエが？」

「あ、あの…こ、こづかいもらつてさ。ついでに下のスーパーで、なんか、アイスでも買ってきたらいい、って」

「あー、そーゆうこと」

なつとくしてもらえたようで、ぼくは心の底からほっとした。

「…で、ユウジは、なににしに？」

「オレ？オレはもちろんゲーセン」

そういつて、ユウジはなにかのゲームカードをポケットから取り出し、ぼくに見せてきた。

「朝からやり続けて、ついに新記録ゲット！しかもルーレットでエクスカリバーゲットしたんだぜ！」

へえ、とぼくは気のない返事をかえす。ゲームセンターに行かないぼくには、なにがすごいのかよくわからない。

ん、ちよつとまてよ。

「いま、朝からって言った？」

「そう！」

ユウジはまるでじぶんが英雄であるかのように語りはじめた。

「朝九時半からドアのまえでスタンバって、十時に開くと同時に猛ダッシュでエスカレーターを駆け上がり、ゲーセンに一番乗りして、昼飯でバーガー食いに行った以外は、ずっとゲーム機からはなれなかったぜ！」

ぼくはぼかんとするしかなかった。

「でも、まだまだオレは止まらないぞ！この夏休み中には、デュランダルもゲットしてやる！」

「はあ…」

なんと言っているのかわからず、ぼくはべつのありきたりな話題を持ち出した。

「宿題はやってんの？」

とたん、ユウジは心の底から嫌そうな顔で、はあつとためいきをついた。

「なにワケわかんないコト言ってるの？やるわけないじゃん」

まるでそれが世界の常識であるかのようにユウジは言った。なんだかその言いかたは、ぼくが「本なんか読まない」って言うときに似ているような気がした。

そしてなぜか、ぼくはいやな気分がした。

「しかも今年はこちらの校長のせいで、読書感想文なんかやんなきゃいけないんだろ？絶対ヤだね。本は将来のためになるとか、ワケわかんねえし」

エレベーターがきて、ふたりでそれにのりこんでも、ユウジの演説は止まらない。

「みーんなおんなじこと言ってるさ。『本はあたまをよくする』、とか『世界がひろがる』、とか言うけどさ、わけわかんねえよ。ならなんでむりやりやらせるばっかで、うまいことオレらやる気にさせられないんだ？本を読んで頭のおよくなったヤツなら、そのやりかただって思いつくだろうにさ。わけわかんねえ」

わけわかんねえ。わかんねえ。

おなじ口調で、べらべらとくりかえす。

ぼくが思ったことのある言葉を。言ったことのあることを。

わかんねえ。わかんねえ。わかんねえ。

「うるさいよ」

その言葉に一番びっくりしたのはぼくだった。気がつかないうちに、低い声でなげすてるようにつぶやいていた。

ユウジは口を半開きにしたまま、ぼかんとしていた。

いつものユウジが、他のやつにおなじことを言われたら、「なんだいきなり」と怒っていただろうと思う。けれど、それを言ったのがぼくだったから、ただただびっくりしていた。

ぼくはなにも言えず、エレベーターからとび出した。そのまま駐輪場まで走り、自転車を猛スピードで走らせた。

なんでだろう。なんであんなこと言っちゃったんだろう。

ユウジが言った、あの「わかんねえ」の声が。

なんであんなにイヤだったんだろう。

じぶんの部屋に入り、ぼくは乱暴にドアを閉めた。

「よう、おかえり」

ベッドの上でラックスが言う。

「本、とどいてたか？」

ラックスの声を聞こうともせず、ぼくはリュックサックから本をふくろごとつかみ出し、ベッドに投げつけた。

「…ども、ありがとう」

いくらか低くなった声で、ラックスはためいきまじりに言った。それからふくろの底をくわえてゆすり、本を取り出した。

「ん、たしかにこの本だ。さっそく読み出すとしよう。…けど、その前に」

ラックスはおもむろにぼくを見上げた。

「なにかあった？」

床にリュックサックをほうり出したぼくは、いすに座ってラックスに背を向けた。

「…べつに」

「べつに？」

ラックスはゆつくりとくりかえした。

「べつに、なにもなかった？なら、なんでそんな顔をしてるんだい」

「どんな顔さ」

歯のあいだからぼくは声をもらした。

ラックスはあごに手をあて、「ふーん」と考える。

「そうだな…かなしいような、おどろいたような、少しこまってるような…そんな顔だな」
そう言つて、ラックスはベッドからおりて机にピョンととびあがり、ぼくの顔をのぞきこんだ。

「話してくれよ。そんな顔で投げつけられたんじや、ちよつぱり読みづらい」

ぼくはラックスの顔を見ずに、少し鼻をすすった。なんでだろう。ほんのちよつぱり、泣きそうな気分だ。

「…本屋を出たらさ。…ユウジにあったんだ」

「ユウジって、クラスメートの？」

「うん。…あいつも、本が嫌いなんだ。それで、あいつが…『わけわかんねえ』って…なんども言ってる。…そ…れが、なんでか…すごく、いやだった。…で、ぼく、おもわず…『うるさいよ』って、言っちゃった」

うまく思い出せず、うまく説明もできなかった。けれどもラックスは、ゆつくりと深くうなずき、「そうか」とつぶやいた。

「…ケイ。きつときみは、『わけかんねえ』って言うのが…いやだったんだな。…きつと、わからない、ってことが…いやになっただ」

わからないことが、いや。

わからないから、いや。

ラックスはゆつくりと言葉を続ける。

「ユウジは、『わかりたい』と思ってない。だから、『わけかんねえ』って言葉をつかう。まるで、だれかを傷つけるための武器みたいに。たくさんいるよな、そんなヤツって。…そしてきみは、その乱暴な『わけかんねえ』が…『わかるうとしないこと』が、いやになっただ」

ぼくはふるえはじめたくちびるのあいだから、声をもらした。

「ラックスは…いやだった？…ぼくがこのあいだ、『わけわかんない』って言ったとき
「ん…いや、『いや』って言うよりは…」

ラックスは少し声を落とした。目をふせ、それからゆっくりとぼくを見上げる。

「かなしかった…かな。悲しかったし、寂しかった。…ちよっぴり、ね」

あのとときラックスが、ぼくに一生懸命話したのは。

楽しいから、だけじゃなくて。

寂しかったから。

ぼくに『わかって』ほしかったから。

なのに、ぼくはそっぽをむいた。

「ラックス…」

声がふるえた。

「ぼくのこと…きらいにならなかったの？」

「なんでさ！」

ラックスは心底心外だ、と言いたげだ。

「きみのことは好きだよ。好きだからこそ、わかりたいし、わかってほしい。きみはどうだい？」
ぼくは歯を食いしばった。ずっと頭の中がぐるぐるして、しんどい。それでも、ぼくは答えた。

「ぼくも、好きだよ。ラックスのこと。わかりたい、し、わかってほしい」
すると、ラックスは目をぱちぱちさせ、目をそらした。

「いや…おれは、『きみはユウジのことをきらいになったのか』…って意味で、聞いたんだけどな」

恥ずかしげに耳をかいてから、ラックスはほほえむ。

「けど、まあ、うれしいよ。うん、よかった」

ぼくもちよつとはずかしかったけど、それをどうにか脇に追いやって、答えた。

「ぼく、ユウジのこともきらいになってない。わかりたいし、わかってほしい」

「だよな。じゃなかったら、きみはそんなに辛そうな顔をしてなかったろう」

ユウジは少し言葉の粗いところがある。けれど、一緒にしゃべったり、遊んだりするのは楽しい。

だから。

「今度、あつたら…あやまるよ、ぼく。…そうだ、ラックスも……ごめん」

「いいんだよ。ユウジと、ちゃんと話せるといいな」

「うん…」

ふと、ぼくはベッドの上の本に目をうつす。

『言葉で話すことばのはなし』

「ねえ…」

と、ぼくはかすれた声を出す。

「今さらなんだけどさ…。ラックスは、なんで話せるの？それに、カラスのだんなも」

ラックスはふき出した。

「くっ、ははっ。ほんとに今さらだな。…そうだな、なんでかって聞かれると、おれもよくわからないんだが…。…うん、やっぱりあれだな。『知りたいと思ったから』かな」

「なんで、知りたいと思ったの？」

「さあ、そこがほんとに思い出せないな…。けどきつと、これはたしかだよ。きみが好きで、

人が好きだから、人の言葉を知り、人を知りたいと思ったんだ。きっと、カラスのだんなも同じだよ」

そしてラックスは、ずっとぼくを見つめる。

「いつかきみにも、知ってほしいな。おれたち猫や、カラスのことばを。——おれたちのことばを」

何度か本を開いてはみたけれど、二、三ページも進まないうちに言葉が頭に入らなくなり、気がつくとも本を持ったままかたまっている。やっぱり、読むのは苦手だ。

それをラックスに言うのと、ラックスはこう返した。

「むりに先へ進もうとしなくていいよ。映画なんかは勝手に進んでいっちゃうけど、本はじぶんでページをめくる。じぶんのペースでいいんだ。だれかの言葉をじぶんの速さに調整できるってのが、本のいいところさ」

当然ながら、夏休みが終わるまでにじぶんで読み終えられるはずもなく、けっきょく読書感想文の文章はラックスに考えてもらった。

「文章はおれが作るけど、その文章を、きみにはできるだけ理解してほしい。だって、きみが考えたものとして提出するんだしね」

本の内容そのものをまともに読んでいないわけだから、感想文のほうも理解は難しかった。けれど、ラックスが文章をさらに噛み砕いて教えてくれるので、もとの文章よりは飲みこみやすかった。

それに、あまりにラックスが楽しそうに説明するもので、いつのまにか、ぼくも最後まで読みきってやる、と決意していた。

読書感想文を書き終わったことは、もちろん親には話していない。買ったこともばれないように、本と感想文はベッドの脇にある棚の裏に隠しておいた。そこから時々ひっぱり出しては、本の続きを読もうと苦戦したり、読書感想文を読み返したりした。国語の教科書すら読みたくないほどだけれど、じぶんで書いたこの感想文だけは、なんとか読むことができた。

一度書き、読むことができて、自信がついたように思う。そのおかげか、大嫌いだった国語の宿題も、どうにかじぶんでできた。

「文章を読めるようになれば、国語の勉強はもちろんしやすくなる。それだけじゃない。算数

も、社会も、理科も、英語だってそう。言葉で書かれてるなら、なんだってわかるようになるさ。もちろん、読めるようになれば、だけどね」

ラックスはいつも、最後に念を押すのを忘れない。ちょっと小うるさいようにも思う。けれど、ラックスは読書感想文だけじゃなくて、他の宿題のわからないところを教えてくれたり、手伝ってくれている。だから、文句は言わないでおくつもりだ。

読めるようになる、とラックスが言うのは、この場合、なにか一冊の本を最初から最後まで読みきって理解する、ということだろう。もちろん目指してはいる。けど、やっぱり難しい。遅くとも、夏休み中には読み終えてしまいたいと最初は思った。けど、ラックスが言うには、「普通の人でもこのぐらいの本にはひと月かかる。きみは三、四ヶ月ぐらいのつもりで読んでほしいんじゃないか」とのことだ。気が遠くなりそうだけど、意地を張りとおそうと思う。

読書感想文を書き終えたころ、ぼくはラックスに言った。

「ねえ、ラックス。カラスのだんなにも、お礼を言いに行きたいんだけど」

もちろんラックスは賛成した。父さんと母さんが仕事の日、ぼくはリュックサックを背負い、ラックスを自転車のかごに乗せて近所の公園に行った。

太陽がかんかん照りで暑かったけど、公園のそばを流れる大きな河の堤防まで行くと、強い風でいくらかすずしかった。ぼくらは河川敷に下り、橋の影に座って水を飲んだ。

「ふう、あつい。外に出たのは久しぶりだ」

コップ代わりの水筒のふたで水を飲みながら、ラックスは息をついた。

「けど、カラスのだんなはどこにいるの？」

水筒から直接水を飲むぼくに、ラックスは言う。

「まあ、あせりなさんな。カラスってのは、ある意味、おれたち猫より自由な生き物だ。きつとそのうち……」

ラックスが言い終わらないうちに、羽音が近づいてきて、一羽のカラスがそばに下りてきた。

「やあ、ラックス。珍しいな、こんな昼間に外に出てるなんて」

「ごきげんよう、だんな」

「だんな、久しぶり」

ぼくはリュックサックから本と読書感想文を引っ張り出した。

「ほら、これ。だんながあの日道を教えてくれなかったら、この本はきつと買えなかったよ。」

どうもありがとう」

「どういたしまして」

「これ、ラックスが書いてくれたんだ」

ぼくはカラスのだんなに読書感想文を見せた。だんなはそれを読み、ふん、と頷いた。

「なかなかいい文章を書くじゃないか、ラックス」

「ありがと、だんな」

「しかし…これは学校の宿題だろう。なら、本当はじぶんで書かなきゃならないんじゃないか？」

ぼくはぎくりとした。最初からわかってやっていたことだけど、今さらながら、やっぱり後ろめたさはある。

「…たしかに、ひとに書いてもらうなんてずるいかもしれないけど…でも、ぼくだって、いつかはじぶんで読めるようになるつもりだよ」

だんなはぼくをじっと見つめていた。それからくくつと笑う。

「ひとに書いてもらうのはずるい、か。なら、大丈夫。ラックスは人じゃなくて、猫だからな」

あ、とぼくは口を開け、それからラックスと一緒に笑った。

「しかし、猫が文章を書く、か。そんな物語もあったな。たしか…」

カラスのだんなが本のタイトルを思い出す前に、ラックスが小声で言った。

「やばい、だんな、隠れて！」

だんなが飛び立つと同時に、一台の自転車がぼくらの前に止まった。

「ケイ…？」

ユウジだった。

「なにしてんだ、こんなところで」

ぼくは口をぱくぱくとさせ、あわてて答えた。

「あ、えと、さ、散歩…じゃなくて、サイクリング」

「その猫は？」

「うちのペット。ラックスって言うんだ」

ぼくが紹介すると、ラックスはユウジに向かって、ニヤーンと人懐っこそうな声を出した。

思えば、ラックスの猫としての鳴き声は、久々に聞いた気がする。

「…で、その本は…おまえそれ、もしかして、読書感想文？」

あつ、とぼくは気づく。こんなところで本や宿題のプリントを地面に並べてるなんて、変に思われるに決まってる。

けどユウジがおどろいたのは、地面においてあることについてじゃなかった。

「おまえまさか、感想文書いたの？」

裏返りぎみの声で、ユウジはぼくに指を向ける。ぼくの頬を汗が流れた。

「うっそ、まじかよ…。いや、それより…」

ぼくはつばを飲みこみ、立ち上がってユウジと向きあった。

「あのさ、ユウジ…」

ぼくは頭を下げ、意識してはっきりと声を出した。

「ごめん！」

しかしそう言ったのは、ぼくだけじゃなかった。

ユウジも同時に頭を下げていた。

「え…」

ぼくは顔を上げ、ぽかんとする。見ると、ユウジも同じ顔をしていた。

「え、なんでケイがあやまんの？」

「なんで、って…」

一瞬、言葉が迷子になった。つばを飲みこもうとしたけど、口の中はからからだった。さっき水を飲んだところなのに。

「こないだ、エレベーターの中で、さ。ほら、急に『うるさいよ』なんて言っちゃって、それで…」

「いや、それはおれが言ったことがイヤだったんだろ？」

ユウジの言葉に、ぼくはふたたびぽかんとする。

「つつても、その…なんでおまえがイヤだったのかは、しょーじき、わかってねえんだけどさ…」。でもおれ、言葉づかいが乱暴なトコあるからさ、だれかにイヤだって言われるのもしよつちゆうだし。…だからケイも、おまえっておれよりはずっとマジメなやつだし、おれが言ったことが、なんか、イヤだったんだらうな、って…」

視線を落としてもごもごと言っていたユウジは、ふたたび顔を上げる。

「だから、その…なにがどうイヤだったのか、教えてくれよ。そしたらおれ、もう一回、あやまる」

このとき、ぼくはどんな顔をしていたんだろう。…きつと、おどろきと、安心と、いろいろな気持ちさまざまだ、変な顔をしていたんだろうな。

「ぼくも、よく、わかんないんだけど…」

頬をぬぐい、ぼくは答える。

「きつと、わかんないのが、さみしかったんだよ」

「…えっ？」

「よくわかんないけどね」

と言って、ぼくは笑ってみせる。

「ねえ、わからないことって、わかりたくない？」

ユウジは目をぱちぱちとさせ、ぼくを見ている。やがて眉をひそめ、つぶやいた。

「…なにそれ、わけわかんね…」

言葉の最後の方は、風の音に消えて行った。

「そういえばさ、この感想文だけど。実はこれ、友達に考えてもらったやつなんだ」

「…あ、そうなの？あ、あ…なんだ！」

とたん、ユウジは笑いだした。

「なんだよ、おれてつきり、おまえがそのぶあつい本読んで、書いたのかと…」

「まっさかあ、できっこないよ。友達が言うには、ぼくがこの本を読みきるには三ヶ月はかかる、ってさ」

「うへえ、目え回りそ」

「だから読み終わるころには秋が終わってるけど…けどまあ、がんばるよ」

「いや読むのかよ！マジかよ！おまえいったい、この夏休みでなにがあつたってんだよ…」
額に手をあてて声をあげるユウジに、ぼくは読書感想文をさしだす。

「ユウジ、これ、読んでみる？なんなら、うつしてもいいよ」

「へっ？」

「どうせ先生たちも、ぼくらがまともに書いてくるなんて思っていないだろうし…あ、これも友達と言ったことなんだけど」

「え、マジで？いいの？マジ？よっしゃ！」

ユウジは原稿用紙をかかげてうれしそうに叫ぶ。

「あー、助かったあ。ほかの宿題は全部答えうつしてたんだけど、これだけは答えがないからさあ。でも親は手伝ってくれねえし、もう、どうにもなんなくて…」

「あれ、ユウジも、やんなきゃって思ってたの？」

「そりゃあやりたかねえけど、先生に怒られんのもヤだしよお。とにかく助かった、ありがとうな。友達にもお礼言つといてくれよ」

「もちろん」

答えたぼくの足元で、ラックスがうれしそうにニヤーンと鳴いた。

「そう言えば、その友達が言ってたんだけど。本を読めるようになれば、言葉で書かれてることとは、なんでもわかるようになるんだってさ。で、わかるためには、『あたらしいとびらをみつめて、ひらいて、であう』ことが大事なんだって」

「へ、へええ…」

うまく理解できないのか、ユウジの声は自信なさげだ。

しかし今度は、「わけわかんねえ」とは言わなかった。

「そう言やあ、その友達って、一体だれなんだ？なんか、話聞いてたら、年上っぽいけど」

「あ……」

ぼくは答えにこまって、首の後ろを搔く。

「まあ少なくとも、小学生じゃあない、ね」

そもそも人じゃないんだけど。

「いったい、だれ？」

「それはヒミツ」

「なんでだよ？べつにいいじゃんかあ」

「まあ、いいから。それより、読んでみてよ」

「ちえー、ケチ。けどまあ、わかったよ。読んでみる。…なあ、読むのはいいけど、ここで立つって読んでたら、ひからびちまうよ。うちにこねえか？」

「いいの？じゃあ、そうする。あ、猫は大丈夫？」

「おう。こないだ、親戚の猫をあずかってたところだし、へーきへーき。行こうぜ」

「ラックス、行くよ」

ニヤン、とラックスはごきげんな声で自転車のかごに飛び乗った。

走り出した二台の自転車を目で追いながら、橋の柵の上で、カラスのだんなが満足げに笑っていた。

了